ペルシア湾岸遺跡出土陶磁器の研究発表を聞いて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9770

金沢大学考古学研究室　2008 年 4 月 1 日

金大考古　第 60 号

ペルシア湾岸遺跡出土陶磁器の研究発表を聞いて

佐々木 達夫

はじめに

2007 年 12 月にペルシア湾を運ばれた陶磁器に関する２つの発表を聞いた。１つは金沢大学で開催した「遺跡出土陶磁器研究の多様性」研究会。ジュルファール遺跡出土の陶磁器をどのように研究するかが中心的話題であった。発表者と題目は、佐々木達夫「研究会の意義」「ジュルファール遺跡の歴史的意義について」、堀井あけみ「イギリス発掘のジュルファール遺跡出土陶磁器の分類」。堀井が英語で発表したのは日本独特の日本語学術用語を知らないためである。佐々木花江「ジュルファール遺跡の陶磁器が語る海上貿易」、垣内光次郎「遺跡出土陶磁器の組成に関する研究法―陶磁器破片から何を読み取るか―」、酒井中「陶磁器薄片分析から何が分かるか」、小川光彦「中国陶磁器の編年研究の方法と課題」、ナン・チーチー・カイ「ミャンマー青磁の種類と分類」。イギリス発掘のジュルファール遺跡出土東アジア陶磁器を整理中のオクスフォード大学大学院・堀井あけみを迎えて、日本の陶磁器研究方法やジュルファール出土陶磁器研究の成果、イギリスでは知られていない東南アジア陶磁器とくにミャンマー陶磁器を教える研究会であり、日本とは研究方法が違うイギリスの研究雰囲気を知ることも目的の一つであった。具体的な出土品を触る前に、エジプトに留学しアラビア語を学ぶことをオクスフォードの教授が命じたというが、物から研究に入る我々との違いも興味深かった。研究会では、出土陶磁器の組み合わせをどのように研究するか、産地推定のための素地分析とその成果、中国陶磁器の編年方法と成果を話題に取り上げた。『金大考古』本号に掲載した酒井中、次号に掲載予定のナン・チーチー・カイ論文はそのときの発表に加筆したものである。

堀井はホームページで言う。インド洋貿易ルートを介してイスラームの中国との関わりをアラビア半島の港から探る。とくに輸入した陶磁器と現地産陶器が文化的・経済的にアラビア半島の港に与えた影響、イスラームの物質面での独自性形成に果たした様相を探る。ただし、発掘者キング教授から与えられた 500 片の出土品は、まだ整理途中で陶磁器分類の基準が不明瞭で産地に対応していないことが発表でわかった。中国青磁も竜泉窯と福建地方の窯の区別を教えてもらっておらず、東南アジア陶磁器は分類もできていない。ミャンマー陶磁器についてはその存在も知らない。研究会翌日にミャンマー人ナン・チーチー・カイがミャンマー青磁を集中的に教えた。2008 年 1 月に佐々木が発掘していたオマーン湾岸のコールファッカン遺跡を堀井が訪れ、ピット内に残るミャンマー青磁をどこのものか堀井は判断できなかった。テーマとして掲げる課題や目的と、実際に研究している内容の落差が大きいこと、目的とやっていることがほとんど関係していないこと、これは若い研究者によく見られることである。目的や課題があいまいで理論も少ない日本の研究者と、研究体制や取り巻く環境の違いが大きいことを感じた。

２つめの発表は、バハレーン国立博物館で開催した “Twenty years of Bahrain Archaeology (1986-2006)” の Bing Zhao“East and Southeast Asian Ceramics imported Bahrain during the Islamic period” である。氷はパリの CNRS に勤め、フランスが発掘したカラートバハレン及びその周辺から出土した中国陶磁器を研究している。資料は 1983 年から 2002 年の間にフランス人が発掘し、その後バハレーン人が発掘した資料を加えた 1,000 点の破片である。これまでにペルシア湾の遺跡から出土した東アジア・東南アジアの陶磁器では、もっとも大量ペルシアと述べた。佐々木はさらに多くの出土陶磁器を扱い、それらを論文や報告で刊行しているが、そうした研究や研究史を知らない出土品紹介であった。

１．研究課題の設定の仕方

二人は日本人、中国人という理由で、ヨーロッパでは中国・東南アジア陶磁器の専門家として扱われている。海上貿易の重要性やその研究上の意義を述べるが、それは自ら研究した成果に基づくものではなく、これまでの研究者の成果で一般に流布しているものである。すでに定説となったテーマを具体的に変更する研究成果はみられない。自らの資料を整理分類し、新たな問題点を明らかにし、細部において研究成果を挙げたわけでもない。すでに先学が資料から積み上げ学界の共通認識となった研究の意義を、そのまま自分の意見として述べているに過ぎない。定説を覆す、あるいは補強する説でもなく、ある遺跡出土の資料を陶磁器研究者に教わりながら勉強して紹介している。遺跡出土品の紹介以外に、新たな成果はない。研究資料を得てこれから研究を進める人たちは、先学の研究を学びながら自分の研究課題を明確に設定し、研究方法を選びながら、論文を書いていく。その課程で研究者として成長していくのだということを実感する。

二人の発表の資料はいずれもすでに有名になった遺跡の発掘品である。しかし、遺跡や遺構との関連が発表ではまったく欠落している。同じ遺跡から出土した他の陶磁器との関係も欠落し、同じ産地の陶磁器と推定されたもののみを資料として提供された。二人の発表者は若い研究者であるため、以前に実施されたそれぞれの遺跡の発掘に参加しておらず、同じ遺跡から出土した他の種類の陶磁器さえ見ていない。遺跡や遺構との関連を切り離し、歴史的意義を探る情報を失ったままで、遺跡の表面採集品と同じ低いレベルになった資料として利用している。これでは発掘品としての価値は薄れ、目的としていた港や貿易、イスラーム陶器との関係を調べることさえ無理となる。目的に達するための基礎資料整理の段階で、効率化と簡略化を選べば研究目的は変化する。

外国で発見される陶磁器は貿易陶磁器と呼ばれることがある。中国陶磁器の場合、同じ種類の器が国内でも国外でも使われ、中国国内で発見されると単に陶磁器であり、貿易陶磁器と呼ばない。イランの陶器を貿易陶磁器と国内流通の陶器に分ける人はいない。私は陶磁器貿易、陶磁貿易と言うが、貿易陶磁とは言わない。産地国の国外で発見された陶磁器を資料として、何を研究するか。新たな問題の設定、方法、成果などを述べることは必要である。すでに一般化している課題を扱う場合、遺跡から出土した新たな陶磁器片を用いているとしても、新たな研究課題というのは難しい。新たに発見された遺跡の資料は紹介する意義がある。とくに周辺に同じような遺跡がない場合は、紹介し資料化する意義が大きい。すでに共通理解がある一般化した課題を追求するための重要な資料となる。そのようにわかる研究目的を設定すると良い。

２．資料の性質と扱い方

貿易品として輸出された陶磁器は遺跡出土品と博物館蔵品に分かれる。遺跡出土品は、遺跡の表面採集品と発掘品に分かれる。表面採集品は遺跡の遺構および同時に使用された生活用具との関わりが不明である。発掘品は遺跡内の遺構や生活用具との関係がわかるため研究資料として優れている。博物館蔵品は歴史的な由来が不明瞭であることが一般的で、そのもの自体を研究対象とすることが一般的である。遺跡出土品と博物館蔵品は、研究の目的や資料としての扱う方法が異なる。

発掘品でも中国・東南アジアの陶磁器のみを他の出土資料と切り離すと、全体のなかでの位置づけができない。イスラーム陶器と大量の土器のなかで占める少量の中国・東南アジアからの輸出品としての価値を生かすことができない。採集品はこの点において研究資料としての価値が低い。12 月発表の二人の発表は、遺跡出土品であるにもかかわらず、遺跡および他の資料から切り離している。二人とも研究対象とする同じ遺跡から出土した他の種類の陶磁器を見ていないが、このような研究態度と方法は出土品の価値を遺跡の採集品と同じ程度に落としてしまう。

博物館蔵品、すなわち歴史から切り離された陶磁器を美術品として検討することは、これまで陶磁器研究の代表的な方法であった。有名な博物館の蔵品はすでに多くの研究者によって取り上げられている。それらを扱うことは、同じ蔵品の再紹介なのか、蔵品をどの視点から問題とするのか、何が新たに明らかとなったか、不明瞭なことが多い。これまでの研究と重なり合う内容であることも多い。有名博物館や有名な遺跡の陶磁器を扱うと、博物館や遺跡が有名という理由で良い研究だと錯覚する人もいる。私は誰も知らない世界の片隅の遺跡を掘って、そこから出土する陶磁器を資

料として使うことが多い。なぜ有名な遺跡を掘らないのですかと聞かれることがある。2007年にバーミヤーンの遺跡から出土した陶磁器を扱ったのは珍しいことである。有名な遺跡の出土品を扱うと、研究助成が得られやすく、研究の意義を述べなくていい利点もある。ただし、すでに研究されたことが多いため、新しい研究の成果をあげることは容易でない。バーミヤーンの陶磁器はこれまでに研究がなかったため、すぐに新たな研究成果が得られるという珍しい資料である。

文献を使用した研究成果、考古学資料を用いた研究成果、気候風土民俗地理などを利用した研究成果などは、別々に研究するか一部を利用することが一般的で、それぞれが融合した研究となることは少ない。一方の研究成果を補完する、あるいは違いを見出すことも必要である。同じ課題の研究であっても用いる研究資料が異なるため、それぞれの資料のなかでのみ論議されていて、異なる研究分野で同じ研究テーマの接点は意外と少ない。

定説という枠組みのなかで資料紹介して、定説のなかで収まる研究であれば、とくに新しい研究成果はない。それにもかかわらず、紹介資料から定説が導きだされたような結論とする人もいる。新たな発見や資料の再検討から一般論を深めた研究成果が資料紹介にも必要である。その方法のひとつに、資料の関連性がある。採集品は関連性を追求するのが難しい。採集品でも遺跡という場所や地点、地域の情報をもち、広い範囲に流通する陶磁器の流通を考える資料とできる。しかし、遺跡内の遺構との関連、他の出土品との関連性は断ち切られている。そのため採集品で数量や組み合わせを考えるのは難しい。年代を採集品そのものから探るのも難しい。発掘が少なく、ある地域の資料紹介が少ない場合は、採集品の資料的価値は高くなる。すでに層位発掘の資料が他種類の陶磁器を含めて紹介され研究されている場合は、遺跡の表面で新たに採集した資料の価値はほとんどない。そうした遺跡からの採集品を研究資料とする場合は、採集品という特徴を生かして研究することが必要である。

３．関連する研究会を聞いて

2008年２月に「中国陶瓷貿易から見たインド洋海域とアジア海域の連関性」研究会が東京で開かれた。森達也「イランArdabīl伝世およびペルシア湾北岸部港湾遺跡出土の中国陶瓷」、四日市康博「モンゴル時代の中国・イラン間におけるKīsh商人の貿易活動」、阿部克彦「Ardabīl出土の陶瓷器にみる中国・イスラーム文化交流」、鈴木英明「港湾から見たインド洋海域世界―フィールドワークの立場から」などである。森・四日市が2007年に行ったキーシュ、ホルムズ、シラーフ、ブーシェフルなどの遺跡踏査で撮影した中国陶磁器の紹介、阿部がアルダビール市内の遺跡から出土した陶磁器の紹介、鈴木がアフリカ沿岸の特殊な陶磁器の使い方を取り上げた。森のシラーフ採集品紹介は、すでに発掘調査された有名遺跡であり、その発掘報告や他のいくつかの採集資料紹介などを読んでいないことの欠点も目立ったが、ブーシェフル近隣の遺跡採集品紹介は新資料であり、学界に寄与するものとなる。アルダビールの伝世品はすでに有名で紹介済みであるが、新たな研究者の目でその特徴を述べることは意義がある。美術館蔵品の再紹介は日本でも展覧会ごとに行うものであり、研究というよりその時点での再紹介という分野であろう。阿部の同じ資料の紹介も何度か学会発表で聞いたが、まだ文章になっていないことが惜しい。鈴木は文献学者であるが地域の遺跡も取り込む新しい研究方法を模索し、陶磁器を装飾として象嵌する建築を用いて他地域との差別化をはかろうと試みたことは評価される。ただし、取り上げた資料はすでに有名であり、同様のものは東南アジアまで広がっている。

４．ペルシア湾陶磁貿易研究の諸問題

ペルシア湾の陶磁貿易ではこれまで、唐・アッバース朝、元代、明代の３時代が取り上げられることが多い。ペルシア湾を航海する大型船は湾内最奥部の水深が浅く、ホルムズ海峡付近の港で交易品を小型船に積み替え、バスラから平底の川船でティグリス河と運河を通ってバグダードに運び、陸上ルートも利用し、船団に連動するキャラバンは大きくなり、移動距離は１日25-30kmであった、などと一般的に説明する。しかし、時代が異なると利用する港町やルートも変化し、それぞれ異なる歴史的説明が必要となり、広域交易圏を形成したイスラーム・ネットワーク論を用いるだけでは時代的な変化の説明はできない。インド洋でイスラーム商人が活躍することも当然とされるが、以前から商業に従事していた拠点的な各地域の商人がイスラーム

教徒となったという意味なら、インド洋海域は多様性が前提となるから、やはり地域ごとの研究と説明が不可欠となろう。

９世紀のアッバース朝と唐代のペルシア湾交易については次のように説明される。インド洋からバグダードに至る交易ルートはインド西南端地域、オマーン湾のスハール、ペルシア湾入口のホルムズ、ペルシア湾内のシラーフ、カーディフ、バスラ（ウッブラ）が港湾都市として交易拠点であった。ホルムズやシラーフはペルシア湾真珠が取引される場でもあった。シラーフは唐代にほぼ廃墟となり、宋代のキーシュから元代のホルムズに拠点港町が移る。アラビア半島側の拠点港町ジュルファールも１世紀間のみの繁栄で、ポルトガル侵攻によって廃墟となった。さらに細かなルートを示す遺跡の調査は必要である。

アルダビール廟の中国陶磁器は元代が含まれるが、明代が多く、清代まで続く。明代はホルムズが拠点であるが、アルダビール廟に納められた中国陶磁器の交易ルートとの関係はどうであろうか。中国陶磁器は目立つから、東から西への貿易を語るのに便利である。しかし、東南アジアの陶磁器、イランの陶器、中央アジアの陶器、アラビア半島の陶器など、各地の陶磁器はそれほど注意を払われていない。多くの資料の中から陶磁器を取り上げるのは、資料残存度が高いという利点があるから仕方のないことである。しかし、中国という一カ所からの遠隔地貿易を考えるのではなく、地域内の貿易、隣接地との貿易、他の地域からの遠隔地貿易など、さまざまな地域との相互交流の貿易を考えることが必要である。多くの遺跡出土陶磁器は意外なほど、地域性をもつ流通圏が限られた生活用品である。

唐代から現代に至るまで、中国陶磁器は西方に輸出されたという前提で研究をする人が多い。唐代も９世紀以降であり、盛唐代の輸出はきわめて少ない。ササン朝時代、中国陶磁器はペルシア湾に輸出されないから、インド洋とペルシア湾の海域世界のつながりが少なかったと誤解されることもある。陶磁器が出土しなくても、貿易があるかないかと直接的な関連はない。陶磁器流通の問題は、生産と産地に関わり、消費地の動向、政治情勢と関連する問題である。中国陶磁器が西に運ばれるのと同様に、西方の陶器やその他の地域からの陶器も各地に運ばれ流通している。中国陶磁器のみを取り上げると、複数の道が交差する陶磁器流通の全体像を１本の道それも一方通行で説明することになり、誤解を招き不適切である。こうした研究方法は近世になるとさらに問題を広げることとなる。

ペルシア湾の場合はメソポタミアからウバイド土器が漁民などによって運ばれ、その後インダスの土器も発見されている。エドゥドール遺跡からは地中海の紀元前後のローマ時代のアンフォーラや Roman fine ware が発見され、メソポタミアからペルシア湾ルート、紅海からインド洋ルートの両者の存在が遺跡出土陶磁器から指摘されている。唐代から、９世紀からという枠組み設定で中国陶磁器を使用して貿易を語ることは一面的な見方である。

５．遺跡出土陶磁器の諸問題

最近発表された研究を聞きながら感じたことを述べてきた。それをまとめると次のようになる。

a．研究に用いる資料の価値について

陶磁器は美術品、骨董品としての価値が高い。陶磁器研究の多くはある特定の種類や器種の陶磁器について語る。遺跡から発掘され採集された陶磁器はこれと異なる価値をもつ。美術品は美しさがあり壊れていないが、遺跡で発見された陶磁器は壊れて破片となることが多い。遺跡から採集された陶磁器は遺跡の遺構や層位との関わりが不明であり、同時に使われ捨てられた他の資料との関係も不明である。発掘品は遺構や層位、他の資料との関係が考古学の研究方法で記録される。こうした基本的な資料の価値を無視して研究成果を検討することはできない。

採集品を生かす方法の一つに産地同定がある。ダキアヌス、スーサの例を挙げる。表面採集品の検討から、そこで陶磁器を生産していたことがわかり、素地と釉と造形から生産された製品がわかった。これまで知られていなかった新たな事実が遺跡の採集品でわかることがある例である（佐々木花江，佐々木達夫，2002「ペルシア湾北岸遺跡と採集陶磁器」『金沢大学考古学紀要』26:27-47.）。採集品、発掘品を含めて、遺跡出土の陶磁器をどのように歴史資料とするか、さらに具体的な研究例が必要である。

b．研究課題について

西アジアの遺跡や美術館に残された陶磁器を用いた研究は、イスラームと中国の文化的・経済的交流、物

の流通、海域世界のつながりなどに別けることができる。一つの遺跡から採集したいくつかの陶磁器片で、このような大きな研究課題が追求できるのだろうか。きわめて難しい。では遺跡数が増え、あるいは採集し発掘した資料が増えると、大きな研究課題を扱うことができるようになるのだろうか。資料の質や量が問題なのか、それとも陶磁器片のみで大きな研究課題を扱うのは難しいのか。研究課題と結論が先にあり、遺跡で採集した陶磁器をその結論に合わせているように思える論文や発表が多いと思う。

１つの陶磁器片をみて、イスラーム商人が扱った商品かどうかを検討することは、適切な課題ではない。インド洋海域の海上貿易に関わるイスラーム商人の研究成果があって、そこに陶磁器を運んだ商人の問題が話題になる。関心があること、歴史的課題として重要であること、これと陶磁器からわかることは簡単に関連付けることができない。研究課題と研究方法の開発は一体のものである。

c．発掘品の重要性

遺跡出土品は遺跡内で研究することが最初の課題である。遺跡内で生活に即した生活用具として位置づけ、その用いられ方を理解することが必要である。多くの遺跡でそれぞれの生活の実態に合わせた陶磁器の使われ方を知り、他の生活用品との組み合わせや時代的変遷を調べる。そうした研究の積み重ねの上で、大きな研究課題のなかで研究資料として利用するのが考古学の代表的な研究方法であろう。遺跡のなかで資料を歴史的に解釈するためには、遺跡の発掘は重要性である。時間がないから、費用がないから、大変だから、というような理由で発掘をせず、簡単に成果が挙がると思い違いして採集品と博物館蔵品のみで研究を続けるのは問題である。

数量の問題は､貿易にとって重要なことである。ジュルファールの例を挙げる。同じ地点で時代的変遷に伴う生活用陶磁器の種類と器種、産地、その組み合わせを研究した（佐々木達夫,2006「ジュルファール出土陶磁器の重量」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』26:51-202.）。海上貿易史研究の基礎資料として各地で同様の資料整理をすることが望まれる。採集品ではできない研究である。

d．１つの陶磁器として見る

興味を引かれる１つの陶磁器を目の前にすると、陶磁器研究者は産地や時代、特徴や流通など、話題が盛り上がる。その物自体を中心において細かな研究を行うことは陶磁器研究者にとって容易なことである。１つの陶磁器を海域間の交流というテーマで論じることは、陶磁器を研究資料として扱い陶磁器を知る専門家ほど躊躇することが多い。テーマと資料の間にある距離が大きく、飛躍が大きいからである。小さな例外かもしれない事実と、普遍的な研究テーマを結ぶ方法が十分とは思われないからである。

e．陶磁器を何に使うか

陶磁器は美術館蔵品、遺跡の採集品、遺跡の発掘品と歴史的研究の資料としての価値は高まる。しかし、陶磁器そのものの研究はこの逆となる。発掘品のように小さな破片は研究資料として利用することが難しい。流通をテーマにすると、種類や器種、質、量を問題とするので、小さな破片でも産地や時代が判定できると資料的価値が増大する。層位的変遷や遺構との関わり、地域的な特徴も加われば、小さな破片も歴史資料として生かされることとなる。

こうした問題を意識せずに美術品や採集品を大きなテーマのなかで扱うことは研究成果が薄れることになるかもしれない。研究課題と目的、方法と資料価値の関連を明らかにしながら、設定した研究課題に近づく研究方法の継続的な開発が必要である。

６．おわりに

ペルシア湾の遺跡出土中国陶磁器を最初に紹介したのはバハレンを訪れた鈴木八司であった（「ペルシャ湾岸の遺跡をたどる」『朝日ジャーナル』1964 年 8 月 2 日)。三杉隆敏は『海のシルクロードを求めて』1968 年､『中近東の中国磁器』1973 年、三上次男は『陶磁の道』1969 年でアジアの陶磁貿易を魅力的に語った。三上は自身でペルシア湾を調査しなかったが、シラーフ発掘報告を用いて長沙窯と越窯を『東洋陶磁』4,1977 年に書いた。1985 年まで私は三上のエジプト調査にお供したが、私がペルシア湾で調査を始めた 1987 年、三上は歿し御同行いただく予定は実現しなかった。近年はペルシア湾で発掘調査が毎年行われ、遺跡の踏査も容易になった。研究の課題や深化が問題になる現状は反省を要する。陶磁の道の研究はヨーロッパ、アメリカにも広がり、陶磁貿易研究の課題と問題点はさらに複雑化している。

(e-mail:tatsuosasaki@hotmail.com)